

### 3 藍染め体けん

羽生市には、昔から武州藍染めという工芸が伝わっている。藍は、虫から服を守り、切りきずなどのかのうをふせぐといわれ、昔はたくさんの紺屋があっただが、今は、市内には三か所だけとなっている。



「うわあ。きれいな色だなあ。」  
藍で染められたたくさんの作品を見て、ぼくは、思わず声が出てしまった。

今日は、楽しみにしていた藍染め体けんをするために、クラス全員で、市民プラザに来た。藍染めのお店には、しよくんさんが作ったシャツやバッグ、のれんなど、藍染めの作品はたくさんあった。色のこさやもようのちがいで全くちがう物に見えて、これから染める体けんがますます楽しみになった。

前のクラスの体けんが終わって、ぼくたちのクラスの番がきた。地下の体けん場所に向かっていくと、なんだかへんなにおいがしてきた。  
「うわっ。」



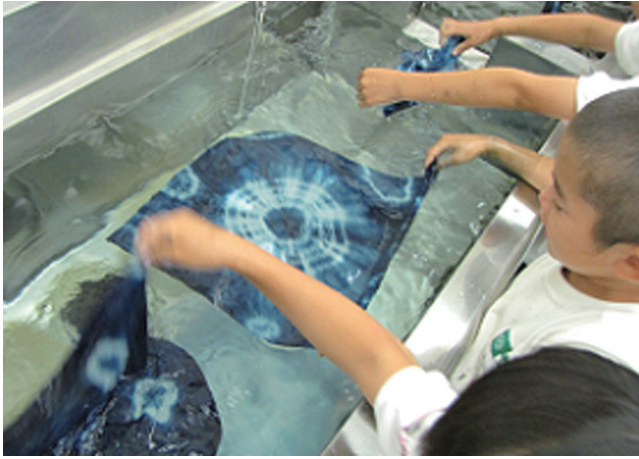
ぼくは、思わず言ってしまった。でも、ぼくだけではなく、友だちもみんな顔をしかめている。においのする方を見ると、黒っぽいえきの入った大きなかめがいくつも地面にうまっていた。「これが、藍あいなのかな。」とふしぎに思った。

はじめに、藍染めあいぞの先生に「藍あい」について教わった。藍染めは、藍あいという植物を育てることからはじまるそうだ。先生から、三月に種たねをまいて、七月にかり取った後、半年以上かけてこの藍あいのえきを作ると聞いて、すごく手間てまがかかることにおどろいた。

次に、ハンカチの染め方そを教わった。いろいろな染め方があるそうだが、はじめてなので、かんたんにならぬで止める染め方を教えてもらった。わゴムをまいた所は染まらずに、白くもようになるそうだ。いろいろな所をていねいにゴムで止めた。

いよいよ藍あいのえきで染めることになった。あの藍あいのえきのたっぷり入ったかめをかこんで、友だちとすわった。かめの中は真っ黒でそこが見えなくて、なんだかどきどきした。

「さあ、染めそてみましょう。」  
と言う先生の声におされて、ぼくは、そっとハンカチを入れた。



「うわあ。すごい。」

ハンカチが青くなった。たった一回つけただけなのに…。

「しっかり染まるように、こうやってハンカチのひだを広げながらやりましょう。」

先生が、藍のえきの中で手をやさしく動かしながらやって見せてくれた。

ぼくも同じようにひだを広げながら、かめの中の藍のえきを見ると、どんな物でも染めてしまえそうだった。ふと気がつく、ぼくもみんなも、あのおいをわすれていた。来た時には、あんなに気になっていたのに…。

となりのもっとこいえきのかめにうつって、もう一度同じように染めた。えきから出したハンカチは、黒い緑色だった。

最後に、水で洗うとできあがりだ。ぼくも、きれいな水でハンカチをやさしくふり動かしながら洗ってみた。

「ええっ。うわあ、きれい。」

水から出したハンカチは、きれいな紺色に変わっていた。藍色に染まっていたのだ。ぼくは、紺色の白くうかぶ丸のものがすごく気に入った。

藍染めの先生におれいを伝えるに行くと、

「世界せかいにたった一つのすてきなハンカチができましたね。」

とほめてくださった。そして、

「藍あいは、生きているのよ。毎日お世話しないとね。」

と、教えてくださった。

その時、先生の手を見た。先生の手あいつの指は、藍色あいだった。しわの中にまで藍あいがしみこんでいた。「先生は、この手で、ずっと藍染あいろめを大切に守ってきたんだなあ」と思った。

家に帰って、染そめたハンカチを広げて見ていると、先生の藍あい色の指を思い出した。

※紺屋：染物屋のこと